



沼津市温室園芸組合の出荷用レッテル
(渡瀬良道氏寄託)

ぬまづ近代史点描 ③

香貫の蔬菜栽培

沼津市の香貫地区は戦前から蔬菜の栽培が盛んであった。大正七年(一九一八)刊行の『楊原村沿革誌』には、「胡瓜・茄子ハ古来気候・風土ノ關係上他地方ニ先ヅ其成熟ノ早キヲ以テ所謂初物トシテ香貫茄子、香貫胡瓜トシテ世上ニ賞翫セラル、久シク、今ヤ種々ノ研究ニヨリテ其作付培養共ニ大ニ進歩ヲ示スニ至ル」と記述されている。安永六年(一七七七)の上香貫村明細帳(『楊原村沿革誌』所載)には畑作物として麦・豆・粟・稗などともに菜・大根・茄子・牛蒡・蕎麦・とうきび・胡麻などがあげられており、近世以来続けられてきた生産だったことがわかる。沼津藩時代には「菜園場」と呼ばれた藩専用の農園も置かれていた。早期栽培は明治十七八年頃から始められたといひ、主として地這胡瓜が取り入れられた。

昭和二年(一九二七)の統計によると(昭和三年版『沼津市勢要覧』)、胡瓜が一〇九二〇〇円、南瓜が五四〇五〇円、茄子が二九六四〇円で生産高

上位である。他に葱・大根・西瓜・漬菜・里芋などが統計の項目としてあがっている。

昭和十二年（一九三七）刊行の『沼津市誌』には、「近年温室、フレームの経営盛んとなり、東京方面に年々多額の移出を見るに至れるは当市の誇りといふべきなり」「一段歩一ヶ年の収穫数百円を得るといふ」と記されている。

戦後は農協を中心に出荷が行われ、促成栽培の名声はより高まったが、三十年代に入るとビニールハウスが一般に普及した結果、香貫蔬菜としての特色は失われていった（『沼津市誌』中巻、一九六一）。



沼津青果市場林券 昭和17年 (野崎権次氏所蔵)

シリーズ

沼津兵学校とその人材

英学者

44

蘭鑑

○園鑑先生ハ去る十日午後胃病にて死去せられたり先生は夙に英学に通ぜられ維新の後静岡藩沼津兵学校の教官となり子弟を教育せられ廃藩置県の後司法省に出仕し専ら翻訳に従事し後判事に任せられたりしが惜しむべし溘然薨を易へられたり（『函右日報』明治17・12・14）

右に掲げたのは、沼津兵学校三等教授であった蘭鑑の死を報じる新聞記事である。兵学校の関係人物、特に教授陣については、当館でも調査を行い少くない人物を発掘してきたが、彼については顔写真もなく展示の中で紹介できずにいる。石橋絢彦の「沼津兵学校沿革」「沼津兵学校職員伝」、大野虎雄「沼津兵学校と其人材」にも彼に関する記載は少ない。

断片的には、幕末には鑑三郎と名乗っていたこと、番書調所英学世話心得や開成所教授手伝並出役などの任にあつて英語を習得して

いたこと、イギリス人教師による海軍伝習に際して翻訳掛頭取に任命されたこと（慶応三年）、などの事実が知られる。開成所時代の慶応元年（一八六五）には、ロシア留学生として派遣されることになった同僚市川斎宮の息子文吉のために他の教官たちとともに横文字による送別の辞を贈っている。各人が専門のオランダ語・ドイツ語・フランス語・英語によつたが、勿論、蘭は英語であつた（『幕末洋学者欧文集』）。

江原素六は蘭とは親しかつたらしく、後年になつて講演の中で以下のような沼津兵学校時代のエピソードを紹介し、蘭の人柄を褒めている（『江原素六先生伝』講演一 二四〜五頁）。

蘭は英学と数学の大家であつたが、すこぶる無頓着な性格で、襟ははだけて胸が見え、羽織の紐は片方がぶら下がっている、袴は帯の結び目の下にずり落ちていると

いった風体であつた。給料の札束をいつも本の間にはさんだまま講義をしていたが、ある日、教室を出る時にそれを落とした。武士にとつては恥じるべき不注意な行爲であつたので、生徒は落とした金のことをどのように報告すべきか困つたが、「先生、何か落としませんでしたか」と尋ねると、「拾つてこい」と言う、拾つてきて見せると「俺のだ」と一言の礼も言わずに引つたくつて懐中にしまひ行つてしまつたという。それを見た生徒たちは後で控室に集まり、蘭のさっぱりして天真爛漫な態度に拍手喝采を送つたという。無邪気で微塵も私心がない人柄だったので、蘭はどんな生徒からも心服されていたという。

明治政府では最初文部省に出仕したらしいが、それ以後の経歴は官員録から追える。たとえば八年（一八七五）時点では正院七等出仕、十四年（一八八一）時点では東京上等裁判所判事であつた。

『地質学』（明治5年、瓜生寅其訳、文部省刊）、『百科全書 北欧鬼神誌』（明治11年、文部省刊）、

『百科全書之中 教学必要巻之式』(明治18年、箕作麟祥共訳)などの訳書がある。

雑司ヶ谷霊園に残る彼の墓には「判事正七位蘭鑑之墓」明治十七年十二月十日卒 歳四十六 法性

江原素六とその周辺<27>

お尋ね者の江原素六をかくまった大沼要右衛門

慶応四年(一八六八)四月、旧幕府陸軍の撤兵頭であった江原は下総国で官軍と抗戦し敗北した。

その後は江戸にもどり友人宅にかくまわれたりしながら官軍の追及を逃れたが、やがて徳川家の駿府移封に従い駿河国に移住する。しかし、官軍との戦いに参加していたという前歴は隠さなければならず、いまだ「お尋ね者」の身であった。最初に仮住まいしたのが駿東郡竹原村(長泉町)の豪農大沼家であった。

江原をかくまった大沼家の当主の名前については、明治三十三年(一九〇〇)三月十八日の江原の談話筆記(『旧幕府』第四巻第四号)には「三島在に隠れ竹原村の用右

院真管理鑑居士」と刻まれている。兵学校当時は三十歳前後であったということになる。彼には実子がなく養子が跡を継いだようである。関東大震災や戦災のため遺族のもとに資料は残っていない。

衛門と云ふ者の宅に居りました」となっていたが、その後刊行された『急がば廻れ』(一九一八年刊)と『基督者としての江原素六先生』(一九二二年刊)では「大沼嘉右衛門」、『江原素六先生伝』(一九二三年刊)では「大沼喜右衛門」となってしまう。近年、辻真澄氏はその著『江原素六』(一九八九年刊)において、「大沼要右衛門」が正しいことを示された。地元の方の聞き取り調査によって確認された事実である。なお、大正期に石橋純彦によって記されたと思われる草稿「沼津兵学校逸話 江原素六翁の壮時」(江原文書M-14)にも「竹原の用右衛門方」とあり、要右衛門が正しいことが裏付けられる。

大沼家は要右衛門で十三代目という旧家であり、名主をつとめた豪農であった。要右衛門の人となりについては墓石に刻まれた銘文が参考になる。以下に掲載する。

大乘院厚得日信居士

本信院妙徳日保大姉

大沼翁成叟墓誌銘 大沼翁成叟善

俳諧凡知俳諧者無不知成叟翁余謂

翁以戸長尽力村事鄉人徳之而目為

俳匠未悉翁之為人也翁本姓渡辺氏

諱豊吉後改要右衛門父諱嘉六郎養

於大沼氏養父諱要八配其女以嗣駿

河駿東郡小泉村富沢人安政六年襲

先職為名主明治維新県制始須為戸

長兼知学務翁為人謹嚴常病鄉俗曰

趨浮靡菲衣惡食儉素自率衆皆仿之

游惰之風一變其接客必正容儀鄉隣

為之語曰侍翁使人不勝坐敬官府崇

神仏每校舎警署社寺修築必先衆義

捐光長寺為八品派本山罹災翁以其

名蹟一朝蕩尽施數百金資再建後以

戸長兼駿東全郡町村連合會議員郡

毎有會議多決翁言翁自努嗜俳諧嘗

遊東京懷所業謁小築庵春湖翁々激

賞見其俳号曰未成笑曰子業已成乃

改号曰五葉庵成叟俳名隆起交道日

広与諸名匠唱和所存録若干卷命日

五葉庵集翁自襲先業三十年正丈量改租凡□村事無所不至此漸厭世務將謝人事結一岫庵寄懷風月未果其志廿六年六月十二日病卒寿五十二一男六女二女夭男猶幼養喜多氏男広次郎配長女以嗣銘曰

今所謂俳流 遺棄人事 放浪自

縦 翁則不然 尽力村事 為郷

里之重 有時乘輿 嘲弄風月

確知無用之為用

東京 岡千仞撰

明治三十三年仲春

嗣大沼広次郎建石

この碑文からは、要右衛門の年齢が江原とほぼ同じであったことがわかる。また、名主・戸長・駿東郡町村連合會議員などを歴任し地域の行政に尽くしたほか、五葉庵成叟の俳号をもつ俳人であったという経歴がわかる。彼は駿東郡富沢村(裾野市)の渡辺家から入った養子であったが、同家の先祖には十八世紀後半から十九世紀初めにかけて活躍した沼津の宗匠六花庵官鼠の門弟であった虎杖こと渡辺嘉六郎知陳がおり、代々俳諧を嗜んだ家であった。なお要右衛門の俳号については野水堂静味と

する文献もある（『長泉町竹原区誌』一九七九年刊）。

江原が大沼家に滞在したのが正確にどのくらいの期間であったのかは不明であるが、その後転居したらしく、明治二年（一八六九）二月時点では西間門村の素封家長倉半兵衛方に仮寓していたことがわかっている。同年中にはさらに西熊堂村に自宅を購入したらしい（二年十月に西熊堂村の清治郎から土地を買取った文書が現存する）。大沼家にいた頃、江原は小野三介から更に水野泡三郎と名を変えていた。田んぼ道などは平然と往来していたが、静岡からの内命であまり公然と出て歩いてはいけなとある者から注意されたという。

要右衛門と江原との交遊関係はその後も続いたと思われる。明治二十三年（一八九〇）、第一回衆議院議員選挙に立候補した江原に対して、その支持者たちが新聞広告を出し支持表明を行ったが、その連名者の中に彼の名前も見いだせるのである（『静岡民友新聞』明治23・6・29）。

お知らせ欄

◎夏の各種企画終了

九月二十九日で企画展「近世・近代ぬまづの俳人たち」は終了しました。当市ではこれまでまとまった形で紹介されたことがなかった分野の展示であり、史料収集の上からも意義ある企画となりました。また、関連して七月八月に四回行われた歴史講座にも熱心な聴講者が集まりました。

八月十五日に行った平和を考える親子戦争史跡めぐりには、9組

19名の参加者があり、小学三年生から中学一年生までの子供たちが地域に残された戦争の傷痕を実地で学びました。

九月の日曜日に五回連続で実施した古文書解読入門講座には四十四名の受講者があり、はじめてのくずし字解読に取り組みました。

◎史料館の収蔵資料

当館には現在、主要なものとして以下のような種類と分量の資料が収蔵されています。是非ご活用下さい。

史料的文献・交流のある大学・博物館・文書館・自治体史編纂室などから寄贈された書籍など。

4. 和装本 約一二〇〇冊

沼津兵学校関係人物の著作や、他の沼津ゆかりの人物の著作、沼津関係地図など。近世から明治前期の木版・和装本が多く、内容的には英学・数学・医学など多様な分野。

5. マイクロ・フィルム 五三二リール

静岡県内で明治初期以降発行された新聞（十二種）と現物で収集不可能な沼津関係の文書資料（九十七件）。

6. 写真 約二万コマ

明治から戦後にいたる時期の沼津関係の古い写真の複写、企画展の展示・図録用に撮影した各種資料の写真など。

現在、十八集まで刊行。

2. 物品・書画類 約一〇〇〇点

歴史資料としての意味をもつ道具・衣装・書画などの他に、沼津・原を描いた浮世絵など当館収集品。

3. 図書 約一万冊

二階の資料閲覧室に配架している。静岡県・沼津市関係の刊行物や日本近代史関係の

沼津市明治史料館通信 第47号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410沼津市西熊堂三七二-一
電話〇五五九-三三三三五
FAX〇五五九-二五三〇一八

